

高齢者の免許所持から見える、親族間の想定ズレについて

1200513 藤本 信哉

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

高齢者への、将来の生活のサポートが、親族の負担になることが想定される。実際に親族への負担があるのであれば、それについて話し合う必要があるはずだが、もし高齢者に対する役割分担を各々が理解していない場合、将来のデザインがあいまいになり、想定ズレが生まれ、もしもの時に瞬時に対応できず、親族間の関係が悪化する可能性が懸念される。

本研究では、ある親族とその高齢者にインタビューを行い、将来の高齢者の生活や10年後親族たちがどのようなサポート体制を形成していると思うか。親族は其中でどのような役割を果たしていると思うかを聞く中で想定ズレを見つけ、そのズレについて追求することができた。

この事例研究を踏まえ、血が繋がっていない親族間では、高齢者のサポートについて、気になっていても、デリケートな話題であるため、なかなか話し合うことができないことが発見された。

今後、免許返納問題を考える上で、親族間の認識ズレを意識することが必要であると分かり、免許返納問題解決のための道筋を示したと言える。

2. 先行研究

先行研究においては、「返納による家族のモビリティの低下、送迎による負担の増加などの問題も考えられ、家族の視点から見た免許返納の問題点についても明らかにしていく必要がある。」[1]とされており、高齢者のサポートが、親族の負担になっていることが想定された。

3. 動機

実際に親族への負担があるのであれば、それについて話し合う必要があるのだが、私の家では、そういった話についてあまり耳にすることがなかった。

もし、高齢者に対する役割分担を各々が理解していない場合、将来のデザインがあいまいになり、親族間で想定ズレ

が生じ、もしもの時に瞬時に対応ができず、親族間の関係性を悪化させる可能性があると考えた。

要するに、事前に高齢者の生活のサポートについて、親族間の認識共有が不十分だと、もしもの時に対応できないのではないかと考えた。

4. 研究目的

高齢者のみ世帯に住む高齢者とそれを取り巻く親族を対象に、

Q1. その高齢者の将来の暮らしとサポート体制の在り方についての親族間の想定ズレは存在するのか。

Q2. Q1における親族間の想定ズレはなぜ発生するのか。

を、導き出し、高齢者と親族はどのような高齢者の暮らしとサポート体制を想定し、親族間でどのような想定ズレがあり、なぜそのズレが発生するのか掘り下げ、ズレとは何かを探る。

5. 研究方法

研究方法として、高齢者と親族一人ひとりの意見を聞きズレや問題点を見つけるため、高齢者である祖父と祖母、親族一人ひとりに分けてインタビュー調査を行う。質問項目として、祖父母に対しては、

「10年後どのように生活をしていると思うか」を聞く。祖父母を除く親族9人に対しては、

「10年後親族たちがどのようなサポート体制を形成していると思うか」

「自分はその中でどのような役割を果たしていると思うか」

を聞く。以上を踏まえた上でズレがあるか探し、ズレがなぜ生じたのか、聞き取りを行う。

研究対象者は高知工科大学の学生であるY君の家族であるX家で、親族でよく集まる関係の良好な一族で家計図は図1になる。

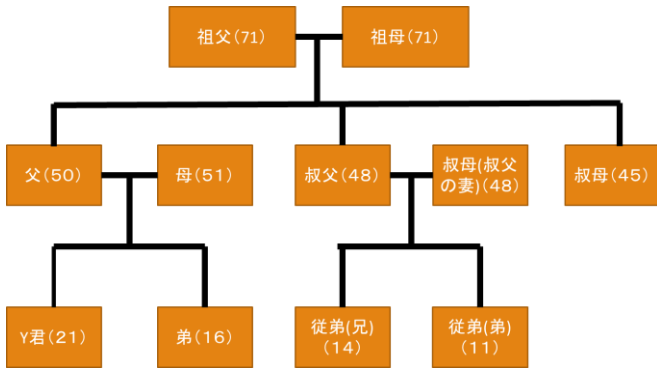


図1 対象者のX家の家系図と年齢の図

登場人物の紹介と居住地

祖父は71歳で、祖母71歳と地方の奥地に二人暮らしをしている。

父は50歳で、母51歳と共働きで、弟16歳と地方の比較的栄えている町に、祖父母の家から約20km離れたところに三人暮らしをしており、Y君は21歳で、高知県で一人暮らしをしている。

叔父は48歳で、叔母(叔父の妻)48歳と共働きで、学生の従弟(兄)14歳と従弟(弟)11歳と比較的市街地に近い町に祖父母の家から約20km離れたところに四人暮らしをしている。

叔母は45歳で、都会で働いており一人暮らしをしている。

6. 結果

インタビュー結果は以下の通りで、左から、インタビュー対象者/インタビュー回数/インタビューの合計時間である。

- 祖父：2回 38分52秒
- 祖母：2回 21分57秒
- 叔母：2回 20分21秒
- 父：4回 31分44秒
- 母：4回 26分29秒
- 弟：2回 31分50秒
- 叔父：2回 18分44秒
- 叔母(叔父の妻)：2回 22分13秒
- 従弟(兄)：2回 18分36秒
- 従弟(弟)：3回 24分9秒

で、約4時間14分55秒の書き起こし二段Word約72枚相当の書き起こしを行った。以下の、図2、図3、図4、図

5が結果の図と記述になる。

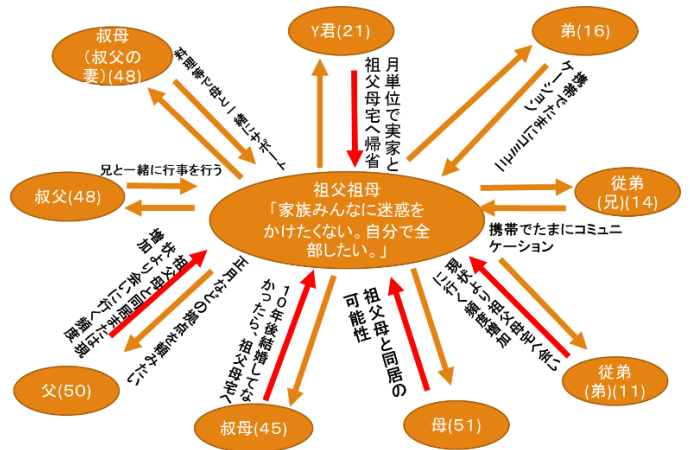


図2 将来の親族と高齢者間における、各自の役割の想定図

図2ではまず、高齢者の将来の暮らしにおいて、祖父母が「家族みんなに迷惑をかけたくない。自分で全部したい。」と語っていたものの、父と母は祖父母との同居を既に想定していて、遠方に住む叔母に関しても10年間結婚がなければ、祖父母宅に戻り同居を想定していた。

Y君と従弟(弟)に関しても、Y君は月単位での祖父母宅への帰省を、従弟(弟)は、現状より祖父母宅へ会いに行く頻度が増加すると想定していた。

弟と従弟(兄)は、将来的に県外就職の可能性があるが、祖父母と携帯でのコミュニケーションをとろうと考えていて、長期休暇は顔を見せると想定していた。

祖父母も、「家族みんなに迷惑をかけたくない。自分で全部したい。」と語っていた一方、正月などの集まる機会がある時は、主に長男である父に任せたいと想定していた。

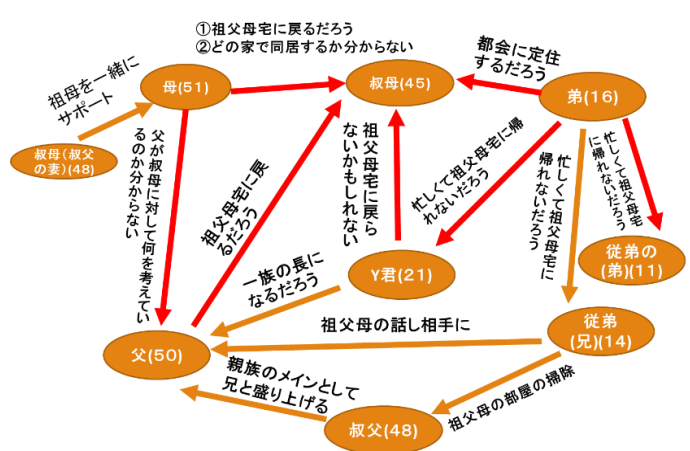


図3 将来の高齢者に対してのお互いの役割の想定図

図3では、図2の情報も含んだ高齢者に対しての親族間に

おける、お互いの役割の想定を書き出した。

父と母は、叔母が祖父母宅に戻るだろうと想定し、逆に Y 君と弟は、叔母が祖父母宅に戻らないだろうと想定していた。

父と母の間でも、叔母が祖父母宅に戻るという同じ想定をしている上で、「叔母も含めた祖父母との同居の可能性はあるか、ないのか」で母はあると答え、父は想定していなかった。

弟は、Y 君と従弟(兄)と従弟(弟)が忙しくて祖父母宅に戻れないだろうと想定していたが、Y 君と従弟(弟)は長期休暇以外にも帰ると想定していた。

従弟(兄)は父と叔父がそれぞれ役割を持って祖父母をサポートすると考えており、例えば、Y 君の父は話し上手だから、祖父母の話し相手に、従弟(兄)の父は、家でも掃除をするから、祖父母宅の掃除をと、適性を見たうえでどのように関わっていくのかを想定していた。

叔母(叔父の妻)は、母とともに料理面などで、祖母をサポートしようと考えていた。叔父も兄と一緒に行事を行うと想定していた。

Y 君は父が一族の長になるだろうと想定していた。

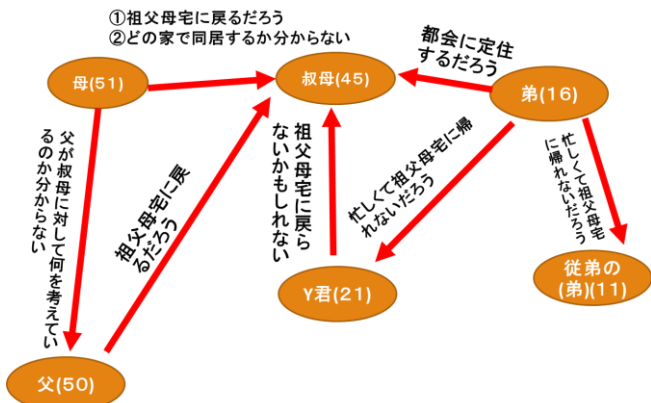


図4 高齢者のサポート体制についての親族間の認識のズレの図

図4では、親族間の認識のズレに関することを詳しく抜き出した。

父と母は、叔母が祖父母宅に戻るだろうと同じ想定をしていたものの、母は、叔母も含めた祖父母との同居の可能性はあるのではないかと悩んでおり、父は叔母を含めた祖父母との同居は考えていなかった点だ。これは、母と父の間で「叔母も含めた祖父母との同居の可能性はあるか、ないのか」の

ところで母はあると答え、父は同居については想定していなかった。そのため、認識のズレであると言えるだろう。

弟は Y 君と従弟(兄)と従弟(弟)が忙しくて祖父母宅に戻れないだろうと想定していたが、Y 君と従弟(弟)は長期休暇以外にも帰ると想定をしていた点では、従弟(弟)に関して将来社会人になれば、宿題などがなく仕事はその場で終わるため、現状よりも会いに行く想定していた。そのため「祖父母宅に戻る」という面では、弟の想定と、Y 君と従弟(弟)の想定では、認識のズレがあると言えるだろう。

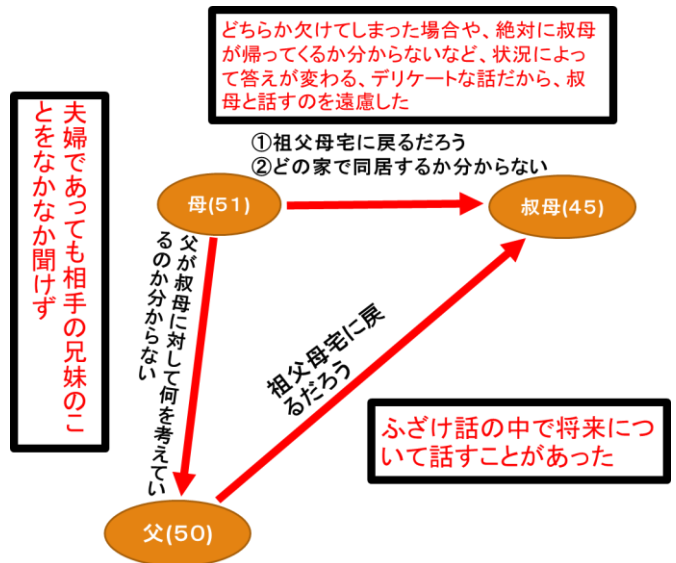


図5 認識のズレの背景図

図5では、もしもの時に祖父母をサポートする親世代を取り上げた。

母は、なぜ叔母に「叔母も含めた祖父母との同居の可能性はあるか、ないのか」を聞けなかったのか、それは祖父母のどちらかが欠けてしまった場合や、そもそも絶対叔母が帰ってくるか分からないなど、その時の状況で答えが変わる、デリケートな話だから、叔母と話すのを遠慮したからだと分かった。

母は、なぜに父に「叔母も含めた祖父母との同居の可能性はあるか、ないのか」を聞けなかったのか、それは夫婦であっても相手の兄妹のことをなかなか聞けなかったことが想定される。

そして父が「叔母も含めた祖父母との同居の可能性はあるか、ないのか」について想定していなかったのは、真剣な話を叔母と2人で話す機会がなかったためだと分かった。しかし、祖父などを交えてふざけ話をすることはあり、その中で

叔母が祖父母宅に戻る話題が出るそうだ。父がその際、叔母に、「叔母が帰ってくれば自分(父)はたまに行けばいいね。」といった話をしていた。そのため父は、叔母が実家に戻り祖父母と三人暮らしをして、自分(父)は通いで実家に行くという想定ができた。このことから父の当初のインタビューにおいて叔母も含めた祖父母との同居の可能性を想定しなかったことが分かった。

7. 結論

今回のX家の事例では、

Q1の、「その高齢者の将来の暮らしとサポート体制の在り方についての親族間の想定ズレは存在するのか。」

については、確かに存在すると分かった。

Q2の、「Q1における親族間の想定ズレはなぜ発生するか」

については、例えば母と叔母のような義理の姉妹の関係性であれば、とても良好な関係であってもデリケートな話題で話しづらく、話し合いのブレーキになっていることが考えられ、父を介してでも聞きづらいことが分かった。

このように母と叔母のような血が繋がっていない関係性であれば、とても良好な関係であっても話しづらいことほどの家庭でもあり得ると言えるだろう。

8. 今回の研究を通して

今回対象となったX家は、月に一回、一族で顔を会わせるほど、仲の良い一族なのだと言っていたが、それでも想定の違いが生じたため、他の家庭は一体どれほどのズレが生じるのか疑問が残った。

だが、今回のように祖父母のサポートは親族自身の今後の人生に関わるデリケートな話題であるため、これを直接話し合うことは難しいのかもしれない。しかし、致命的なズレに関しては、親世代の子供など聞きやすい人物に指示をして、それとなく親族に聞き出し、思いをやりとりする伝書鳩の役割になることも将来のデザインを描きやすくなる方法だと考える。

引用文献

- [1] 居住地特性から見る運転免許返納者の特性把握
橋本 成仁, 山本 和生(2011)
都市計画論文集 2011年 46巻 3号 p. 769-774
最終閲覧 2020年 2月 4日